

インタビュー会話の分析活動から学ぶより良いインタビューの方法 —会話データ分析の手法を学ぶ学部授業での実践をもとに—

中井陽子

要旨

学部生対象の会話データ分析の手法を学ぶ授業で、聞き手としてより良いインタビューを行う際の方法について受講生がどのように考え、どのようにインタビュー会話のデータを分析し、自身の今後のコミュニケーションに活かそうとしているのかを受講生のワークシートの記述をもとに分析した。その結果、まず、授業中の話し合いによって、インタビュー会話についての事前知識として多角的な規範が意識化されたことが分かった。さらに、インタビュー会話の分析活動で、聞き手のより具体的な言語行動、非言語行動等が詳細に意識化されたことが分かった。こうした分析活動を受講生が行うことで、自身の会話を振り返り、今後の日常生活や就職活動等に活かそうとしている様子が見えてきた。これらをもとに、コミュニケーション教育のための教材開発の展望についても検討した。

キーワード

インタビュー会話、会話データ分析、規範、意識化、教材開発

1. はじめに

インタビューを聞き手として効果的に行うことは、人生の中で様々な人から情報を得るために重要な行為である。それは、有識者から聞いたことをもとに論文執筆や発表を行うアカデミックな活動だけでなく、様々なアイデアや経験を聞き取って新たな考えを生み出すといった職場の業務にも欠かせない。また、経験豊富な他者から聞いたことを自身の人生を考える糧とする等、人から話を聞き出す行為には意義がある。そのため、インタビューを行う行為は、大学の勉学等で必要とされるアカデミック・ジャパニーズの範囲だけでなく、生涯にわたるキャリア形成という長期的な視野から、その重要性に着目し、教育現場で取り上げていく必要がある。そして、教育現場では、どのように聞き手としてインタビューを行い、相手から効果的に話を聞き出せるかについて、分析的な視点から受講生に考えさせる活動を行うのがよい。そうした視点は、自身のこれまでのインタビューに関する見聞や経験といった事前知識を振り返り、意識化することで、より広がり、深まると言える。さらに、実際のインタビュー会話を見て、そこでどのようなことが行われているのか、会話データ分析を行って自身で気づいていくことも重要だと考えられる。

そこで、本研究では、学部生対象（日本人、外国人留学生）の会話データ分析の手法を学ぶ授業の中で、聞き手としてより良いインタビューを行う際の方法について受講生がどのように考え、どのようにインタビュー会話の特徴を分析し、自身の今後のコミュニケーションに活かそうとしているのかを受講生のワークシートの記述をもとに分析する。これにより、今後のコミュニケーション教育のための教材開発の展望についても検討する。

2. 本実践に関連する先行研究

まず、本実践で参考にした、会話データ分析活動の先行研究を概観し、受講生が会話の特徴を分析する効果について述べる(2.1)。次に、受講生がどのようなインタビュー会話に対する規範(事前知識)を持ち、どのようにインタビュー会話における聞き手の役割の特徴を分析しているのか探るために、その基礎知識となる先行研究を概観する(2.2)。

2.1 会話データ分析活動

会話データ分析は、録音・録画・文字化した会話データによって、実際の言語行動、非言語行動を詳細に記述・分析するものである(中井 2012)。よって、会話データ分析は、会話を客観的に分析する視点を養い、自身の会話を内省・改善していけるため、日本語教員養成にも活かされている。例えば、中井(2012)では、日本語教員養成コースにおいて、会話データ分析の基本的な知識を導入しつつ、初対面会話、ロールプレイ、ストーリーテリング等の会話データのほか、受講生自身が参加する会話データを分析する授業実践について報告している。実践の結果、受講生の会話を分析する視点が育成され、日常生活の中の会話の特徴を意識化するようになり、受講生自身のコミュニケーション能力にも変化が見られたとしている。大場(2013)では、学部生対象のコミュニケーションのあり方について学ぶ授業において、日本語母語話者と非母語話者による接触場面の会話データを分析することで、接触場面で起こりうる問題を意識化しやすくなる利点を指摘している。

以上を参考に、筆者は、学部生が会話データ分析を行うことで、会話の特徴を意識化し、自身の会話を客観的に見つめ直し、改善していけるようになるための授業を行った。本研究では、特に、就職活動等、将来のキャリア形成の中でも必要な会話の1つであるインタビュー会話の分析活動に焦点を当てる。これは、中井(2012)、大場(2013)では扱われていない分析活動である。この分析活動を通して、学部生が実際にどのようなことを学び、自身の今後のコミュニケーション活動に取り入れようとしているのか分析する。

2.2 インタビュー会話の分析

加藤(2002, p. 21)は、規範について「会話の参加者によって正しいルールであると判断されるものの基準」と定義し、日本語授業で母語話者が学習者にインタビューされる中で、母語話者が問題を感じ、こうあるべきだと意識化した規範について分析している。その結果、母語話者は、インタビュー前に聞き手は十分な準備が必要だ、話し手にとって適切なテーマ設定をするべきだ、はじめに話し手の属性を聞くべきだ、聞き手が話を膨らませるべきだ、話し手に敬意を示す表現の使用が必要だ、話し手を不快にさせる音調や身体行動はよくない等の規範を意識化したとしている(加藤 2002)。

さらに、インタビュー会話における聞き手の発話の特徴については、次のような点が明らかにされている。小玉(1996)は、対談集のインタビューの開始部でホストがゲストをほめることによって、良い雰囲気を作り、双方の連帯感を作り出し、ゲストを会話へ巻き込もうとしていると述べている。大塚(2005)は、インタビュー番組の司会者がゲストの話に対して、相づち詞のほかに繰り返しや言い換えを用いる、相づちの後に情報提供をする、質問をする、終助詞「よね」等の確認要求をする等して、番組の進行を円滑に行おうとしていると指摘している。小林(2010)は、インタビュー番組のホストが用いる発話機

能を分析し、ゲストの回答に対してホストが確認要求（例：～ということですか）を多く用いていたとしている。そして、ゲストが回答しやすくするために、ホストが事実説明（例：～けれども）や見解表明（例：～と思うんですけれども）を用いてゲストの情報をまとめ、その後に情報要求を行うという質問の仕方をしていたとしている（小林 2010）。

以上のようなインタビュー会話の規範と特徴を踏まえ、本研究では、元々持っている事前知識を「規範」として捉え、(1)学部生がインタビュー会話に対してどのような規範を意識化し、(2)実際のインタビュー会話の特徴をどのように分析し、(3)今後の自身のコミュニケーションに活かそうとしているのかを探る。

3. 授業概要

本実践は、2017年度10月～1月（90分 x 13回）に筆者が行った会話データ分析の手法を学ぶ選択科目である。受講生は、日本人学生（学部生 29名）と外国人留学生（学部生 2名、研究生 7名）であった。この授業は、学部 3、4年生が専門に関わらず履修でき、受講生の中には日本語教師や英語教師を目指す者もいれば、それ以外の職業を希望する者もいた。授業の目的は、ビデオ撮影した実際の会話データをもとに日本語の会話の特徴を客観的に分析し、自身の話し方を振り返り、より良いコミュニケーションとは何かを考え、今後の自身のコミュニケーションの仕方の参考にするというものであった。会話データの分析活動では、雑談（第 1～2回）、誘い・断り（第 5～6回）、依頼・承諾（第 7～8回）、体験談・スピーチ・話し合い（第 9～10回）、インタビュー会話（第 11回）を扱った。これらの会話データは授業担当者が予めビデオ撮影し、会話データにあわせて分析ワークシートも作成して用いた。なお、第 2～4回は、受講生が 3～4人のグループになり、自身が参加する雑談を撮影し、分析・発表をする活動を行った。さらに、第 12～13回は、受講生がグループで独自の会話データを収集・分析・発表する活動を行った。

本研究では、第 11回に行ったインタビュー会話の分析活動を対象とする。この活動では、表 1 のワークシートの設問(1)～(2)に基づいたグループでの話し合いを中心とした。

表 1 インタビュー会話の分析活動のワークシート設問

ワークシートの設問内容	目的・活動
(1)・どんな時に誰に何をインタビューするか ・どうすればインタビューがうまく行くか ・インタビューがうまく行かない場合の原因は何か	規範の意識化 (事前知識の話し合い)
(2)インタビュー会話ビデオを視聴し、相手の話の引き出し方等、聞き手の優れた点、成功要因は何か分析して、書き出す。	会話データ分析 (会話例は後掲 4.2)
<u>インタビュー会話ビデオの詳細</u> 聞き手：男子学生 N（4年生）、中学の時に剣道の経験がある 話し手：剣道部元部長 W（5年生） 両者の人間関係：多少の面識がある 内容：入部のきっかけ、良かったこと、大変だったこと、学んだこと等 事前設定：上記の大きな質問項目のみ事前に両者に伝え、質問と回答をある程度準備してきて、当日、これを軸に即興で話を展開させる	
(3) (2)の分析の感想、今後の自身のコミュニケーションで気を付けた点は何か。	今後の活かし方の検討

まず、(1)インタビュー会話に関する規範を想起し、意識化する機会とした。次に、(2)筆者が事前に撮影した実際のインタビュー会話ビデオの開始部（5分程度）を視聴し、主にインタビューの発展の仕方を分析した（ビデオの詳細は表 1 参照）。最後に、(3)分析の

感想と今後気を付けたい点を各自、ワークシートに記入した。なお、設問(1)～(2)は、ワークシート記入後、グループごとに話し合った内容を口頭報告し、それに対して、授業担当者が会話データ分析の専門的観点から補足説明を行うことで、全体共有を図った。

4. 受講生のワークシート記述の分析

受講生がインタビュー会話に関してどのような規範を持っているか(4.1)、インタビュー会話のデータをどのように分析しているか(4.2)、今後の自身のコミュニケーションにどのように活かそうとしているのか(4.3)について、表1に示したワークシートの設問に対する受講生の記述をもとに、分類して分析する。

4.1 インタビュー会話に関する規範の記述

受講生がインタビュー会話に関する規範についてグループで話し合って意識化し、それをもとに、ワークシートに記述したものを筆者が分類し、項目名を付けて、表2にまとめた。ここから、受講生は、より良いインタビュー会話について、①の1.目的、2.対象者、3.内容のほか、②と③の1.事前準備、2.相手への配慮、3.質問の仕方、4.相手の対応の仕方等の規範を出し合い、意識化していたことが分かる。こうした規範は、日常のテレビ番組等のインタビュー会話を通して構築されてきたものだと考えられるが、本実践でのグループの話し合いを通して、より多角的な視点から意識化されたとも考えられる。なお、本実践では、インタビュー会話の前に、雑談等の分析を行っており、既に聞き手の相づち等による配慮といった点は意識化されていたとも言える。

なお、「2.2 インタビュー会話の分析」で概観した加藤(2002)、小玉(1996)、大塚(2005)、小林(2010)で明らかにされているインタビュー会話の規範や特徴に当てはまる表2の項目には、下線を付した。ただし、「話しやすい雰囲気を作る」といった「②-2.相手への配慮」の面を大雑把に述べるものは見られたが、具体的な方策として「ほめ」(小玉1996)を挙げるものは見られなかった。また、「相づち、コメントで、発話を促す」といった「②-3.質問の仕方」を述べるものは見られたが、「繰り返しや言い換え」「相づち+情報提供、質問、確認要求」(大塚2005)といった詳細な言語的特徴を挙げるものもなかった。さらに、「具体的に質問する、言葉巧みに質問し、核心にせまる、答えを引き出す」といった「②-3.質問の仕方」を述べるものは見られたが、「確認要求、事実説明、見解表明、情報要求」(小林2010)といった詳細な言語的特徴を挙げるものもなかった。実際のインタビュー会話に参加したり視聴したりしながら意識化した規範ではないため、このような詳細な点はまだ出てこなかったものと思われる。

表2 受講生が意識化したインタビュー会話に関する規範(各記述は筆者要約)

①どんな時に誰に何をインタビューするか	
1. 目的 ・何かを知るため ・調査、研究のため	3. 内容 ・知識、情報、事実、経験 ・理由、意見、感想
2. 対象者 ・ <u>そのことを知っている人、自分より情報量が多い人(当事者、関係者)</u> ・ <u>専門家(教授、その道のエキスパート)</u> ・一般人、知人 ・有名人(選手、受賞者、俳優、政治家)	4. 例 ・メディア(記事、雑誌、テレビ) ・記者会見、受賞 ・街頭インタビュー、職業インタビュー ・就職活動(OB・OG訪問、企業訪問、面接) ・論文作成

②うまくインタビューする方法	③インタビューがうまく行かない原因
1. 事前準備 <ul style="list-style-type: none"> 目的や欲しい情報を明確にする 下調べをして予備知識を得ておく 対象者を絞る、有識者を探す 質問点を明確にし、流れを考えておく 	1. 事前準備 <ul style="list-style-type: none"> 下調べ不足 専門ではない人に聞く 質問点がはっきりしていない。
2. 相手への配慮 <ul style="list-style-type: none"> 突然押しかけない 敬意を払う、敬語を使う マナーのある態度を見せる、お礼を言う 相手をリラックスさせ、話しやすい雰囲気を作る プライバシーを守る（相手の文化も配慮して失礼な質問をしない） 答えづらいことを聞かない 質問を明確にする 相手の話を聞く姿勢を見せる（目を見る、反応をする、好奇心を見せる） 反論しない、突っ込まない、割り込まず最後まで聞く 	2. 相手への配慮 <ul style="list-style-type: none"> 突然押しかけて質問する 失礼な態度をとる プライバシーに踏み込み失礼な質問をする 質問があいまい、答えづらい 回答に対しての反応が薄い 相手の話を聞いていない 反論する、割り込む
3. 質問の仕方 <ul style="list-style-type: none"> いきなり本題に入らず、アイスブレイクをして、相手の信用を得る 目的を述べてから質問する 具体的に質問する、言葉巧みに質問し、核心にせまる、答えを引き出す 相づち、コメントで、発話を促す 話を広げる、つなげる 流れを大事にする メモとる 時間を管理する 急いでいる人には聞かない 	3. 質問の仕方 <ul style="list-style-type: none"> 目的が分かりづらい質問をする 聞き方が具体的ではない 自分の質問を頑なに守ろうとする 同じことを再度聞く テンポよく質問できない 簡潔でなくダラダラ長く聞く 誘導質問をする 一問一答で、一方的に質問をする 知識が足りず、相手の返答が理解できない 話を広げようとしなない 質問を準備してこず、相手任せに話させる 質問内容が一貫していない 声がハキハキしていない 自分が話し過ぎてしまう
	4. 相手の対応の仕方 <ul style="list-style-type: none"> 相手が話しすぎる 意図した解答が得られない 話し手と聞き手がかみ合っていない

4.2 インタビュー会話の分析の記述

受講生がインタビュー会話ビデオを視聴し、聞き手の優れた点、成功要因を分析した結果をワークシートに記述したものを筆者が分類し、項目名を付けて、表3にまとめた。

表3 受講生によるインタビュー会話の分析の記述（各記述は筆者要約）

①事前準備	<ul style="list-style-type: none"> 事前に剣道部のことを調べているため、相手の心をつかんでいる
②相手への配慮	1. 内容 <ul style="list-style-type: none"> 相手が喜ぶことを言って話を引き出している
	2. 聞き手の反応の仕方 <ul style="list-style-type: none"> 相手の話への反応をよくして、相手が話しやすくなるようにしている 反応の仕方が豊富で、タイミングが絶妙（例：驚きを表す） 同調的な相づち（例：確かにそうですね） 興味深そうな相づちを使っている（例：そうなんですか） 笑いを交えた相づちで親しみやすくしている 相づちの量・打ち方がよい（例：あー、はー、ほー、なるほど） 「なるほど」+聞いたことの部分的な繰り返し 相手の話をまとめ、感想を述べ、自身の理解を伝えている 自分の体験も交えて話し、相手に寄り添って聞く 相手への敬意がある、穏やかに丁寧話す（例：お願いできますか） 口を挟まずにずっと聞いている、反論しない 場の雰囲気をよく読んで、親しみやすく、話しやすい人に見える

	3. 非言語行動	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き方（うなずき、笑顔、目を見る、相手の方を向く、前傾姿勢） ・笑うべきところでよく笑い、話を盛り上げている ・相手のジェスチャーを真似る
③ 質問の仕方	1. 内容	<ul style="list-style-type: none"> ・部活の紹介をざっくりしてもらってから、個人的な質問に移っている ・質問が明確で分かりやすい ・事前準備した質問があるが、その場の相手の言葉を主体にして質問していた、話を広げている ・相手の話を引き出し、整理している、相手の話から質問を作って深めようとしている（例：ということは、～。つまり、～）
	2. 話の繋げ方・まとめ方	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の解釈も含め、うまくまとめて反応している ・前の質問と繋げて次の質問をし、会話の流れが自然 ・「相手の話の要約（前置き）＋とあったんですけど＋質問」 ・相手の回答で足りない情報を補って聞き直している
④ 相互行為		<ul style="list-style-type: none"> ・互いに分かり合って話しており、話し手と聞き手の息が合っている ・相手が相づちを求めている部分で相づちを打っている ・相手が共感を求めているところで、大きな相づちを打つ

ここから、受講生は、①事前準備、②相手への配慮（1. 内容、2. 聞き手の反応の仕方、3. 非言語行動）、③質問の仕方（1. 内容、2. 話の繋げ方・まとめ方）、④相互行為をインタビューの成功要因として分析していることが分かる。特に、表2で見たような規範について、実際の会話データを例として見ることで、より具体例を出しつつ詳細に分析していることが分かる。例えば、下調べをして相手をほめること、相づち等の聞き手の反応、質問を繋げる接続表現、うなずき、笑顔、視線、姿勢といった非言語行動等、実際に用いられる言語表現や非言語行動等にも細かく注目していることが分かる。また、話し手と聞き手の息が合っている等の相互行為といった点は、規範についての話し合いでは出てこなかった点であり、実際の会話データを見ることで、改めて気づいている様子が分かる。

補足として、受講生が分析したインタビュー会話の開始部の一部を会話例(1)に示す。受講生が分析していた表3の項目番号も以下示す。ここでは、「1N:挨拶-3N:剣道部の紹介-32N:大会での好成績-50N:入部のきっかけ」という話題展開である。聞き手Nは、まず1Nで礼儀正しく話し手Wに挨拶をしている(②-2. 聞き手の反応の仕方)。そして、3N「じゃあ、まずはじめに一なんですけど」、32N「～って、おっしゃってましたけどー」、50N「相づち+えーとー、じゃあ+～っていうことだったんですけどー」と、話題と話題を繋ぐ表現で次の質問・確認要求を行い、話題を円滑に展開させている(③-2. 話の繋げ方・まとめ方)。内容面ではNは、3Nで剣道部の全体像を聞いてから、54NでWが入部したきっかけといった個人的な話について質問している(③-1. 内容)。Wの話の間、Nは相づちや笑顔、笑い等で反応している(②-2. 聞き手の反応の仕方、②-3. 非言語行動)。さらに、Nは34Nから剣道部が大会で良い成績を残した点を下調べしてきてほめることで、35WでWを笑顔にさせ、広報誌に載ったという話を引き出している(①事前準備、②-1. 内容)。さらに、話し手Wが8W「まあ、かく言う僕も大学{笑い}初心者から始めたんですけどー。」と部長の自分が初心者で入部したという意外性のある発話をする、聞き手は9N「あ、そうなんですね。」と大きめの相づちを打っている。ここからも、話し手が求めたところで聞き手がタイミングよく反応し、互いの息を合わせている様子が見られる(④相互行為)。こうした特徴を受講生がそれぞれ分析していたと言える。

ただし、「②相手への配慮」において、受講生は「相手をほめて話を引き出す」という分析はするが、ほめることで双方の連帯感を作り出す(小玉 1996)効果の面までの深い

分析は見られなかった。また、受講生は「聞き手の反応の仕方が豊富だ」という分析はするが、「繰り返しや言い換え」「相づち+情報提供、質問、終助詞『よね』による確認要求」(大塚 2005)といった詳細な言語的特徴の分析はなかった。さらに、「③質問の仕方」において、受講生は、確認要求(例:~ということですか)のほか、事実説明(例:~けれども)や見解表明(例:~と思うんですけども)でまとめた後に情報要求を行うという発話機能のパターン(小林 2010)までは詳細に分析するものは見られなかった。

会話例(1)インタビュー会話の開始部(N:聞き手、W:話し手の剣道部元部長)

1N: {おじぎ} //じゃあ、今日はよろしくお願//いします。{おじぎ}	挨拶
2W: {おじぎ} よろしくお願いします。{おじぎ}	
3N: じゃあ、まずはじめに~なんですけど、あの~先輩が所属している剣道部の紹介についてちょっと簡単に、お願いできますか。	繋ぐ表現+質問
4W: えっと一、A大学の剣道部は、今大体、全員で40人ぐらい、ですかね、部員がいて、	
5N: あ一。{うなずき}	相づち+うなずき
6W: まあ、特徴としては結構、あの初心者が多いっていうのが、特徴で一、	
7N: あ一。{うなずき}	相づち+うなずき
8W: まあ、かく言う僕も大学 {笑い} 初心者から始めたんですけど//ど一。	
9N: あ、そうなんです。ね。	相づち
(中略)	
32N: この間一、あれですよ、でも初心者が多いって、おっしやって//ましたけど一、	繋ぐ表現
33W: はい。	
34N: こないだの大会でも結構、いい成績一、残してらっしゃい//ましたよね。	確認要求
35W: {笑顔で} 知ってます? {笑い}	
36N: B市の一//大会で一、	ほめ
37W: はい。	
38N: 結構//いい成績で一。	ほめ
39W: 学校の一、何かあの一、広報誌みたいなのに載って一、	
40N: あ一はい。	相づち
41W: 僕もびっくりしたんですけど一。	
(中略)	
47W: まあ、それが結構最近、あった中では一番大きい、剣道部のニュースかなっていう、	
48N: うんうん//ん。	相づち
49W: 感じですかね。	
50N: そうすか、なるほど。え一と一、じゃあ先輩は大学から始めたっていう//ことだったんですけど一、	相づち+繋ぐ表現
51W: はいはい。	
52N: なんで一、その一、結構続けてる人が一、入るイメージが、僕も強いんですけど//ど一、	繋ぐ表現
53W: うん。	
54N: その中で何で剣道部を選んで、入ったんでしょうか。	質問

4.3 今後のコミュニケーションで気を付けたい点の記述

インタビュー会話の分析の感想、および、今後の自身のコミュニケーションで気を付けたい点について、受講生がワークシートに記述したものを筆者が分類し、項目名を付けて、代表的な例のみ抜粋して、表4にまとめた。ここから、受講生は、①実際の会話ビデオを見ることで、インタビュー会話での聞き手が行う具体的な方法を学び取っている様子が分かる。さらに、②今後インタビューの熟練者の技を分析する等、さらなる知的好奇心を持った者もいた。そして、③表2、3で記述したインタビュー方法の事項を踏まえつつ、自身が普段聞き手としてどのように振舞っているか振り返り、どのように相手の話を聞くべきか考え、日常生活や就職活動等、今後自身がキャリアを積んでいく際のコミュニケーションに活かそうという姿勢が見られた。

表4 インタビュー会話の分析の感想・今後気を付けたい点の記述（受講生記述抜粋）

①ビデオ分析の感想・学んだこと	<p>1. 会話データの分析活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かなりうまい聞き手の実際のインタビューを見て、とても参考になった <p>2. 聞き手の役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞き手の役割はただ受け身的に情報を得ることだけではなく、情報を得やすい環境を作る（下調べや表情、リアクション等）ことや、情報の理解を確認する（追加となる質問をする、話をまとめて区切る）こと等、積極的に働きをすることで、相互の意味交渉が生まれ、より深い理解ができるようになるのだと思った。 ・良いインタビューを行うには、聞き手側の役割が大きいと思った→聞き手がいかに相手の話に対する興味を示せるか：相手の話をしっかり聞いていること、理解していることを暗に伝えられるような相づちや返答が重要だと感じた。 ・聞き手がいかに上手く相手の話をひき出すかは、相づちやコメント（＝言語行動）、目線や姿勢等の非言語行動も大きく関わってくると思った。 ・やっぱり大事なのは要所要所を押さえつつなごやかかつ自然な流れで話をすすめることなんだなと思います。自分も卒論の調査でインタビューをしたのですが実際に聞いてみると相づちが多すぎたかなと反省しました。
②今後の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・プロの技等を知って、聞き手としてどうあるべきかについて知りたいと思った。 ・これからインタビューを見たらどういう所が良くて、どういう所が良くないのか等について気を付けて見て行きたいと思いました。 ・今後様々なタイプのインタビューを分析することで、自分のインタビュー力を上げられるのではないかと思いました。 ・インタビューの中で、どれくらい笑いが必要か分析してみたいと思った（笑いがあることで、会話がはずんだり、聞きにくい突っ込んだことまで聞けるか等）。
③今後気を付けたい点	<p>1. 日常生活で</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手によって相づちの「程度」と「頻度」をうまく使いこなせるようにしたい。 ・普断の会話でも、相手が嬉しいと思うような反応を心がけたい。 ・自分は相づちが多すぎたり、臨機応変に質問を変更したりできないと思うので、参考になる点が多々ありました。 ・私は細かく相づちを打ちすぎて「本当に聞いているの？」と思われてしまっている可能性があるなので、適度に、絶妙なタイミングでうなずいたりコメントを入れたりする必要があるなと思いました。 <p>2. 就職活動で</p> <ul style="list-style-type: none"> ・OB訪問をした時、失礼なことを聞かないように気をつけすぎて、あまり踏み込んだ質問ができなかったので、予め調べていくことが大切だと思いました。 ・これから就職活動が本格化し、OB訪問や面談・面接の機会も格段に増えると思う。その中で相手にどう見られるのか、どう反応すればいいか参考にしたい。 ・今後就活等で初対面の人と話す機会が多くなるので、相手の目を見てしっかり話を聞く、話すことは忘れずに心がけようと思う。

5. まとめ

以上、学部生がより良いインタビュー会話についてどのような規範を意識化し、どのように会話データを分析し、その分析結果を今後どのように活かそうとしているか見た。

まず、学部生が良いインタビューとはどのようなものかといった規範を授業中の話し合いで意識化し、表2のように多角的な視点が出された。この規範は、テレビ番組等の多様なインタビュー会話の事前準備～開始部～終了部といった幅広い知識を想起しながら出されたと言える。これは、加藤（2002）で分析されているインタビュー会話に関する母語話者の規範の種類に加え、目的、対象者、内容のほか、事前準備、相手への配慮、質問の仕方、相手の対応の仕方といった点から幅広く規範を捉えることを可能にすると言える。次に、インタビュー会話データの分析活動では、実際のインタビュー場面が視覚化され、表

3のように具体的な言語行動、非言語行動等が詳細に意識化された。これは、表2のような身の周りの経験から漠然と持っていた、聞き手の配慮、質問の仕方、話の繋げ方・まとめ方等に関する規範をより具体化するのに役立ったと言える。こうした分析活動を行うことにより、表4のように、自身の会話を振り返り、日常生活や就職活動等の今後のキャリア形成に活かそうとしている様子が見られた。

今後の課題は、会話データの分析活動を通して受講生が自身の規範を意識化しつつ、実際の会話データからより具体的に言語行動、非言語行動等が分析できる教材をさらに改善・開発していくことである。特に、本実践の会話データの分析活動では、ほめることで双方の連帯感を作り出す(小玉 1996)効果の面や、相づちとその後続く発話(大塚 2005)といった詳細な言語的特徴、発話機能のパターン(小林 2010)等の分析は行えなかった。今後は、先行研究の分析の枠組みを示す等して、文字化資料をもとにインタビュー会話のより詳細な分析が図れるようにしたい。また、インタビュー会話の良い例だけでなく、悪い例等、より多様な例を比較分析し、より多角的な視点からより良いインタビュー会話の方法を検討できるような教材を開発したいと考える。

さらに、本研究で得られたインタビュー会話に関する学部生の規範や会話データの分析例をもとに、今後、日本人学生や留学生用のインタビュー練習教材を開発することも可能だと言える。その際、自分達のインタビュー会話を撮影して自己分析・他者分析する、アナウンサー等の熟練のインタビューの方法と比較分析する等の分析活動も取り入れることも有効であろう。そして、受講生がコミュニケーションを行う様々な場面を想定した教材を開発し、自身の今後のコミュニケーションのあり方を考える機会となりうるより効果的なタスクも検討していきたいと考える。

(中井陽子なかいようこ・東京外国語大学・ynakai@tufs.ac.jp)

付記

本研究は、平成 28～30 年度科学研究費(基盤研究(C))「会話データ分析の手法を用いたインターアクション能力育成のための教材開発」(研究代表者:中井陽子)(16K02800)の成果の一部である。

参考文献

- 大塚容子(2005)「テレビインタビュー番組におけるあいづち的表現ーポライトネスの観点からー」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編』44, 55-69.
- 大場美和子(2013)「会話データ分析研究を活用した日本語教員養成課程の授業実践の分析ー接触場面におけるコミュニケーション行動の問題を対象にー」『広島女学院大学国語国文学誌』43, 1-14.
- 加藤好崇(2002)「インタビュー接触場面における「規範」の研究」『東海大学紀要 留学生教育センター』22, 21-40.
- 小玉安恵(1996)「対談インタビューにおけるほめの機能(1)ー会話者の役割とほめの談話における位置という観点からー」『日本語学』15(5), 59-67.
- 小林友美(2010)「テレビのインタビューの談話における『話段』の展開」『国語研究』73, 34-46.
- 中井陽子(2012)『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房